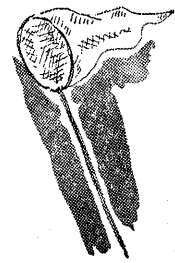


# 立ちどまる

—てんぐや—にて



宮川せい

私が勤めている幼稚園の子どもたちにとって「てんぐや」は一つのオアシスのようなものであるらしい。「てんぐや」でジャポonyaを買った」「メンコもあるよ」「きょう二時半にてんぐやで会おう」などとはずんだ声が耳に入る。「てんぐや」とは幼稚園から三〇〇メートルくらいの奥まったところにある子ども相手の駄菓子屋さんで、これといった小売店もないモダンな住宅地の幼稚園近辺ではいわば異色の存在である。

かねてから私は「てんぐや」という名前にもひかれていたので一度のぞきたいと思っていたが、なかなか実行のチャンスがなかった。不用意にノコノコ出かけたあげく、店先で子どもたち「センセイ」とさわぎたてられたりしたら探訪の目的も興味も半減してしまう。ところが好機が到来した。幼稚園の隣家のゆみ子ちゃん(園児)が「てんぐや」の大ファンで私と同伴してくれ

ることになった。さわやかに晴れた日の午後三時ごろ、サングラスをかけた私と、小さな手さげをさげたゆみ子ちゃんは、手をつないで出かけた。

「てんぐや」の店が見えてきた。看板にてんぐの面が大きく出ている。「どんなものを売っているのだろう」とあれこれ想像するうちに胸がドキドキしてきたのはわれながら呆れた。四十年余りも前のこと、駄菓子屋の店先で紙の着せ替え人形や、ガラス玉のゆびわ・黒い鉛玉・赤い紙で束ねられた肉桂棒などをじっと眺めていた自分の姿が目に見えなくなった。

「てんぐや」の店先には型通りのアイスクリームボックスが置かれ、立ったままでアイスをなめている子がいる。中に入るとすぐ入口のコーナーに四十からみのおばさんがいて小さいお客の相手をしている。狭い店内にはゴチャゴチャいろいろなものがある

が、床のたたきがきれいに掃除されているのが気持ちよい。お客としてすでに男の子三人、女の子三人が来ている。その中の一人は、我が園を卒業した二年生の健ちゃんなので一瞬ぎくりとしたが、声はかけないことにした。

まず目についたのは水平に置かれた洋服箱ほどの浅い箱である。表面は二十くらいのみす目区切れ、一面に描かれた怪獣の絵の間に「ショッキング宝箱」という文字が見える。三年生くらいの男の子がおばさんに二十円払ってからげんこつで一つのます目を強く押した。すぐバジャリと紙が破れて中から小さいゴムのおびが出てきた。「なんだ小さいおびだ」といって男の子はつまみ上げ、ちょっと考えてからまた二十円払い、別なます目を押した。今度もやはりおびだが前のよりずっと大きくて赤い口を開けている。「今度のおび大きいわね」と声をかけると、ニコッと笑って二匹のおびをポケットに入れて帰っていった。

さて同伴のゆみ子ちゃんはなにを買いたいのだろう。彼女は盛んにいろいろなものにさわっていたが、ついに小袋入りのインスタントラーメン状のものをとりあげた。「あら、これ煮て食べるものでしょう?」と私はげげんに思い聞いてみると、「これおやつなの。ゆみ子食べたことあるの」と離さない。サンダラス越しに袋の字を読んでみるとなるほど「このまま食べるおやつ」と書いてある。「遊ぶものがないのよ」と私はつぶやきながら店内をまわってみた。ボール、鉄砲、かめんライダー、カード、お菓子類……とても数えきれない。

一方健ちゃんはと見ると、私には気づかず真剣でクニャクニャ曲るマンガ人形をいじっている。あの子はいつも落ちつきがなくて担任の先生を悩ましたっけ……。女の子が粉末ジュースの小袋を買った。家へ持って行って飲むのだろうか。それにしてもこの店の食べ物はずっと気になる。広口ガラスの容器の中に焼きいかの足が入っているが、蓋はずしたままで、子どもは手を入れて取っている。ゆみ子ちゃんに「食べるものはやめましょうね」と小声で言ったが、おばさんの視線を背中にかけてそろそろ引きあげることにした。

結局私は、ゆみ子ちゃんのためにヨーヨーとキビガラに似た工作材料を選んだ。ゆみ子ちゃんは熱望の買物「おやつラーメン」とお花のシールを手さげに入れて満足そうだった。私も現代の駄菓子屋風景をじかに見ることでできてうれしかった。

(東横学園野川幼稚園)